

10/9 Wed.

第592回 定期演奏会
サントリーホール 19時開演
SUBSCRIPTION CONCERT No.592 / Suntory Hall 19:00

指揮
Honorary Conductor

バス
Bass

男声合唱
Men's Chorus

合唱指揮
Chorusmaster

特別客演コンサートマスター
Special Guest Concertmaster

ハイドン
HAYDN

[休憩]
[Intermission]

ショスタコーヴィチ
SHOSTAKOVICH

ユーリ・テミルカーノフ (名誉指揮者) -p.5

YURI TEMIRKANOV

ピョートル・ミグノフ -p.6

PETR MIGUNOV

新国立劇場合唱団 -p.7

New National Theatre Chorus

富平恭平 -p.7

KYOHEI TOMIHIRA

日下紗矢子

SAYAKO KUSAKA

交響曲 第94番 ト長調《驚愕》 [約23分] -p.9

Symphony No. 94 in G major "Surprise"

I. Adagio - Vivace assai

II. Andante

III. Menuetto : Allegro molto

IV. Finale : Allegro di molto

交響曲 第13番 変ロ短調 作品113

《バビ・ヤール》 [約59分] -p.10

Symphony No. 13 in B flat minor, op. 113 "Babi Yar"

I. バビ・ヤール

II. ユーモア

III. 商店にて - IV. 恐怖 - V. 立身出世

字幕：一柳富美子 字幕操作：Zimaku プラス

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団

助成：文化庁文化芸術振興費補助金 (舞台芸術創造活動活性化事業)

独立行政法人日本芸術文化振興会

公益財団法人アフィニス文化財団



公益財団法人三菱UFJ信託芸術文化財団

協力：アフラック

10/14 Mon.
holiday

第115回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
横浜みなとみらいホール 14時開演
YOKOHAMA MINATO MIRAI HOLIDAY POPULAR SERIES, No.115 / Yokohama Minato Mirai Hall 14:00

10/15 Tue.

第626回 名曲シリーズ
サントリーホール 19時開演
POPULAR SERIES No.626 / Suntory Hall 19:00

指揮
Honorary Conductor

ヴァイオリン
Violin

特別客演コンサートマスター
Special Guest Concertmaster

シベリウス
SIBELIUS

[休憩]
[Intermission]

チャイコフスキー
TCHAIKOVSKY

ユーリ・テミルカーノフ (名誉指揮者) -p.5

YURI TEMIRKANOV

エマニュエル・チェックナヴォリアン -p.8

EMMANUEL TJEKNAVORIAN

日下紗矢子

SAYAKO KUSAKA

ヴァイオリン協奏曲 二短調 作品47 [約31分] -p.12

Violin Concerto in D minor, op. 47

I. Allegro moderato

II. Adagio di molto

III. Allegro, ma non tanto

交響曲 第5番 ホ短調 作品64 [約50分] -p.13

Symphony No. 5 in E minor, op. 64

I. Andante - Allegro con anima

II. Andante cantabile, con alcuna licenza

III. Valse : Allegro moderato

IV. Finale : Andante maestoso - Allegro vivace

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団

助成：文化庁文化芸術振興費補助金 (舞台芸術創造活動活性化事業)

独立行政法人日本芸術文化振興会

協力：横浜みなとみらいホール (10/14)

後援：横浜アーツフェスティバル実行委員会 (横浜音楽祭2019パートナー事業) (10/14)

令和元年度 (第74回) 文化庁芸術祭参加公演 (10/15)

10/19 Sat.

第221回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール 14時開演
SATURDAY MATINÉE SERIES No.221 / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

10/20 Sun.

第221回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール 14時開演
SUNDAY MATINÉE SERIES No.221 / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

指揮
Honorary Conductor
ヴァイオリン
Violin
コンサートマスター
Concertmaster

ブラームス
BRAHMS

[休憩]
[Intermission]

ブラームス
BRAHMS

ユーリ・テミルカーノフ (名誉指揮者) -p.5

YURI TEMIRKANOV

セルゲイ・ハチャトゥリアン -p.8

SERGEY KHACHATRYAN

小森谷巧

TAKUMI KOMORIYA

ヴァイオリン協奏曲 二長調 作品77 [約38分] -p.14

Violin Concerto in D major, op. 77

I. Allegro non troppo

II. Adagio

III. Allegro giocoso, ma non troppo vivace

交響曲 第2番 二長調 作品73 [約40分] -p.15

Symphony No. 2 in D major, op. 73

I. Allegro non troppo

II. Adagio non troppo

III. Allegretto grazioso (Quasi Andantino)

IV. Allegro con spirito

指揮

ユーリ・テミルカーノフ

(名誉指揮者)

YURI TEMIRKANOV, Honorary Conductor

ロシアが誇る世界的巨匠
劇的なサウンド、
珠玉の名曲選



©読響

世界各地の聴衆から愛されている、偉大なロシアのマエストロが読響の指揮台に上がる。披露するのはショスタコーヴィチの大作〈バビ・ヤール〉など、読響との演奏を熱望した三つのプログラム。80歳を迎え、ますます円熟味を増す巨匠の至芸を堪能したい。

1938年、旧ソ連・コーカサス地方のナルチク生まれ。66年に全ソ連指揮者コンクールで優勝し、レニングラード・フィル（現サンクトペテルブルク・フィル）でムラヴィンスキーのアシスタントに任命された。その後、レニングラード響の首席指揮者、キーロフ劇場（現マリインスキー劇場）の音楽監督などを経て、88年から現在までサンクトペテルブルク・フィルの芸術監督・首席指揮者の任にあり、充実した活動でロシア音楽界を牽引している。

欧米では、ロイヤル・フィルの首席指揮者、ドレスデン・フィル、デンマーク国立放送響の首席客演指揮者、ポルティモア響の音楽監督などの要職を務めたほか、ウィーン・フィル、ベルリン・フィル、ロンドン響、ロイヤル・コンセルトヘボウ管、ニューヨーク・フィル、フィラデルフィア管、ボストン響、シカゴ響、クリーヴランド管など、世界中の一流楽団と共演を重ねている。BMGレーベルから多数のCDをリリース。2015年春の叙勲で、日本・ロシア間の音楽を通じた交流及び相互理解の促進に寄与したとして、旭日中綬章を受章した。

読響には2000年に初登場し、楽団員と聴衆の双方から絶大な支持を得て共演を重ねた。15年6月から名誉指揮者の任にある。

10/9
定期

10/14
みなとみらい

10/15
名曲

10/19
土曜マチネー

10/20
日曜マチネー

Maestro

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団

共催：東京芸術劇場（公益財団法人東京都歴史文化財団）

助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）



独立行政法人日本芸術文化振興会



バス

ピョートル・ミグノフ

PETR MIGUNOV, Bass

テミルカーノフら巨匠から信頼を寄せられるバス歌手が読響初登場。レニングラード生まれ。サンクトペテルブルク音楽院を修了。グリンカ国際コンクール第2位など受賞多数。2000年にカーネギーホールにデビューして成功を収め、03年からはボリショイ劇場を中心に、世界各地で活躍している。これまでに〈イオランタ〉ルネ王役、〈ボリス・ゴドゥノフ〉ピーメン役、〈炎の天使〉ファウスト役などを歌い、ロジェストヴェンスキー、ゲルギエフ、ソヒエフらと共演を重ねている。クルレンツィスからはショスタコーヴィチの交響曲第14番のソロに何度も指名され、マーラー室内管との共演ではベルリン音楽祭に出演。ムジカエテルナとのCDはレコード・アカデミー賞を受賞するなど、高い評価を得ている。

男声合唱

新国立劇場合唱団

New National Theatre Chorus, Men's Chorus

1997年にオープンした新国立劇場で、オペラ公演のための合唱団として活動を開始。厳正な審査によって選ばれるメンバーは100名を超え、新国立劇場が上演する多様なオペラ公演を通じて、年々レパートリーを増やしている。個々のメンバーは高水準の歌唱力と演技力を有しており、合唱団としての優れたアンサンブル能力と豊かな声量を誇る。その確かな実力で、公演ごとに共演する出演者、指揮者、演出家をはじめ、国内外のメディアからも高い評価を得ている。読響とは2007年以降、年末の〈第九〉公演をはじめ数多く共演。特にラヴェル〈ダフニスとクロエ〉、ストラヴィンスキー〈詩篇交響曲〉、メシアン〈アッシジの聖フランチェスコ〉では見事な歌唱を披露し、絶賛を博した。

東京生まれ。東京芸術大学指揮科卒業。指揮を高関健、田中良和、小田野宏之の各氏に師事。東京二期会、新国立劇場、藤原歌劇団、日生劇場等のオペラ公演で副指揮、合唱指揮、コレペティートルを務めた。これまでに、〈フィガロの結婚〉〈椿姫〉〈パルジファル〉〈カルメン〉〈ばらの騎士〉〈エフゲニー・オネーギン〉〈ルル〉など、多数のオペラを手がけてきた。2017年の〈アッシジの聖フランチェスコ〉でも新国立劇場合唱団の合唱指揮を務め、好評を得た。群馬響、東京シティ・フィル、東フィル、東響などにも客演。東京二期会音楽スタッフ、新国立劇場音楽スタッフなどを経て、今年4月に新国立劇場合唱指揮者に就任。洗足学園音楽大学非常勤講師。



合唱指揮

富平恭平KYOHEI TOMIHIRA,
Chorusmaster

10/14
みなとみらい

10/15
名曲

Artist



©UWE ARENS

ヴァイオリン

**エマニュエル・
チェクナヴォリアン**

EMMANUEL TJEKNAVORIAN,
Violin

豊かな叙情性と完璧な技巧で聴衆を魅了する新鋭。1995年ウィーン生まれ。父はアルメニア人の名指揮者ロリス。2015年シベリウス国際コンクールで第2位に輝いて注目を集めた。これまでにテミルカーノフ、シャイー、M.ザンデルリンク、ビシュコフらの指揮で、ウィーン響、ベルリン・ドイツ響、フランクフルト放送響、チューリヒ・トーンハレ管、サンクトペテルブルク・フィル、ロンドン響などと共演。今後も、フィルハーモニア管、ロンドン・フィルなどとの共演が予定されている。ラインガウ音楽祭、メクレンブルク=フォアポンメルン音楽祭などにも出演。17年には、欧州の権威ある新人賞“エコー・ライジングスター”に選ばれ、デビューアルバム『SOLO』はオーパス・クラシック賞を受賞するなど絶賛された。今回が読響初登場。

10/19
土曜マチネー

10/20
日曜マチネー

Artist

内に秘めた情熱を大胆かつ繊細な音で表す孤高のヴァイオリニスト。アルメニア出身。2000年のシベリウス国際コンクールに続き、05年のエリザベート王妃国際コンクールでも優勝し、一気に国際的な脚光を浴びた。これまでにテミルカーノフ、マズア、ゲルギエフ、プロムシュテット、ネルソンス、ドゥダメルらの指揮で、ウィーン・フィル、ベルリン・フィル、ロイヤル・コンサートヘボウ管、ミュンヘン・フィル、ロンドン響、ニューヨーク・フィル、ボストン響などと共演。今年はエッセンバツハ指揮のSWR響、チョン・ミョンフン指揮のスカラ座フィルのソリストも務めた。CD録音も数多くリリースし、好評を博している。使用楽器は、日本音楽財団より貸与された1740年製グアルネリ・デル・ジェス『イザイ』。今回、読響初登場。



©Marco Borggreve - Naive

ヴァイオリン

**セルゲイ・
ハチャトゥリアン**

SERGEY KHACHATRYAN, Violin

ハイドン

交響曲 第94番 ト長調 〈驚愕〉

フランツ・ヨーゼフ・ハイドン(1732~1809)の音楽生活は、長年にわたり仕えたハンガリーの大貴族ニコラウス・エステルハージ侯爵が1790年に亡くなると大きく変化した。宮廷楽団は解散したが、ハイドンの楽長の肩書は保持されたまま職務から解放され、自由な音楽活動が可能になった。するとハイドンのもとに次々と仕事の話が舞い込んできた。そのなかで作曲家の心を動かしたのが、ドイツのヴァイオリニストで興行主のペーター・ザロモンからの誘いであった。1781年にロンドンに移住し、公開演奏会を主催していたザロモンは、新作の交響曲をハイドン自身の指揮で演奏する企画をもちかけた。制約の多い宮廷生活とは異なる有利な条件と、パリと並ぶ音楽都市でのコンサート活動は魅力的で、ハイドンはロンドン行きを決意。1791~92年と1794~95年の2回、ロンドンに渡り、ザロモンのために12曲の交響曲(第93~104番)を書いた。

ハイドンの交響曲は、ロンドンの聴衆に温かく迎えられ、第94番は1回目の滞在中に作曲された。〈驚愕〉というタイトルは、第2楽章のティンパニを伴う突然の強打音に由来し、初演翌日の新聞の批評においてこの名称で紹介された。

第1楽章 アダージョ〜ヴィヴァーチェ・アッサイ、ト長調 木管楽器と弦楽器が交替するゆるやかな序奏に続き、主部ではのびやかな第1主題と、シンコペーションのリズムに導かれて細やかに動く第2主題が現れる。

第2楽章 アンダンテ、ハ長調 主題と四つの変奏。弦楽器の軽やかな主題は、第2変奏ではハ短調となり、第3、第4変奏では管楽器が主題を受け持つ。

第3楽章 メヌエット：アレグロ・モルト、ト長調 ニュアンス豊かなメヌエット。中間部は弦楽器とファゴットで演奏される。

第4楽章 フィナーレ：アレグロ・ディ・モルト、ト長調 舞曲風の第1主題と静かな第2主題が対比され、反復されながら軽快に進められる。最後は、ティンパニを合図にコーダに入り力強く結ばれる。

〈柴辻純子 音楽評論家〉

作曲：1791年／初演：1792年3月23日、ロンドン／演奏時間：約23分

楽器編成／フルート2、オーボエ2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部

10/9
定期

Program Notes

ショスタコーヴィチ

交響曲 第13番 変口短調 作品113 〈バビ・ヤール〉

ソヴィエト連邦の独裁的指導者スターリン（1879～1953）の死後、文化芸術面でのいわゆる「雪どけ」はゆるやかに進んだ。政治においても、1956年2月の共産党大会における党第一書記兼首相フルシチョフのスターリン批判をきっかけに政治犯の名誉が回復されるなど、時代は大きく転換した。その流れは、ユダヤ人問題を扱ったエフトゥシェンコ（1933～2017）の詩「バビ・ヤール」が1961年に発表されると、さらに加速された。バビ・ヤールとは、ウクライナの首都キエフ近郊の溪谷の名称で、1941年にこの地を占拠したナチス親衛隊らによって、約34,000人のユダヤ人が銃殺された。

この若き詩人の詩を親友の音楽学者グリークマンから教えられたドミトリー・ショスタコーヴィチ（1906～75）は、そこに彼が長年抱き続けてきた反ユダヤ主義への嫌悪がストレートに表現されていることに感銘を受けた。すぐにこの詩をテキストに作曲することを決め、1962年4月にバス独唱とバス合唱、オーケストラのための交響詩〈バビ・ヤール〉を完成させた。ちょうどこの頃、エフトゥシェンコの新しい詩集が出版された。ショスタコーヴィチはそこから3篇の詩を選び、さらに書き下ろしの1篇を加えて、全5楽章の交響曲第13番として同年7月20日に書き上げた。ここで取り上げられた詩は、反ユダヤだけでなく、芸術の検閲や虐げられた女性など、スターリン時代に隠蔽されていたものへの批判や風刺を含み、ショスタコーヴィチは心の奥底にある感情を音楽とともに放出させた。

「雪どけ」とは言っても、社会主義体制のソヴィエト連邦で芸術家の自由な発言が許されたわけではない。初演に至るまで、当局から陰湿な妨害工作を受けた。なかでも、ショスタコーヴィチの盟友ムラヴィンスキーから初演の指揮を断られたことで作曲家は傷ついた。バス歌手も次々降板し、初演当日も当局の圧力で予定の歌手がキャンセルして、代役で準備していたグロマツキイが舞台に立った。それでも、コンドラシン指揮のモスクワ・フィルハーモニー交響楽団による初演は、大成功を収めた。しかしその数日後、エフトゥシェンコは、圧力に耐え切れず、「バビ・ヤール」の歌詞の一部をユダヤ人問題が曖昧になるように書き換えた。ショスタコーヴィチも当該箇所（箇所）の音楽の改訂を当局から求められたが応じず、音楽を変更

する必要がない箇所（箇所）のみの歌詞の改訂を受け入れた。なお、今回は改訂前の原典版歌詞で歌われる。

第1楽章 バビ・ヤール アダージョ、変口短調 悲劇の舞台となった溪谷で、古代エジプトから現代までのユダヤ民族の歴史に思いをめぐらせる。鐘の音とともに低音楽器で重苦しい第1主題が示され、最初の独唱の後、荒々しい第2主題が現れる。激しく高まるが、アンネ・フランクのエピソードは弱音で語られる。

第2楽章 ユーモア アレグレット、ハ長調 現代への風刺を語ったスケルツォ楽章。ハ長調の力強い主和音と諧謔的な楽句（かいぎやく）が交替する。中間部に作曲家自作の歌曲〈処刑前のマクファーソン〉（1942）の引用、後半には革命歌が飛び込む。

第3楽章 商店にて アダージョ、ホ短調 ここから終楽章まで曲は切れ目なく続く。戦争で夫を失ったロシアの女性は、少ない食料を求めて真冬の通りに列をなす。第1楽章第1主題と関連する低弦楽器の導入から、子守歌風の第1主題が独唱の背景に現れ、カスターネットとウッドブロックを合図に第2主題が示される。

第4楽章 恐怖 ラルゴ、嬰ト短調 恐怖に打ち克つても、新たな恐怖が迫る。不安に満ちた主題から始まり、第1楽章の第1主題や第3楽章の動機が現れる。合唱による革命歌風の行進曲を経て、最後は静かな響きのなかに溶け込む。

第5楽章 立身出世 アレグレット、変口長調 軽やかなフルートの二重奏で始まる。弦楽器の流麗な主題に続き、ファゴットのおどけた主題が独唱と合唱の対話を導く。模範となる作家は「レフか？」の問いに、合唱が「レフ」（文豪レフ・トルストイを指す）だと答える。これは当時の通俗作家アレクセイ・トルストイへの揶揄（やゆ）である。大規模なフーガが展開された後、楽章冒頭の主題が穏やかに広がり、チェレスタの反復は鐘の音とともに結ばれる。

〈柴辻純子 音楽評論家〉

作曲：1962年／初演：1962年12月18日、モスクワ／演奏時間：約59分

楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ3（イングリッシュホルン持替）、クラリネット3（エスクラリネット持替、バスクラリネット持替）、ファゴット3（コントラファゴット持替）、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（シンバル、ムチ、小太鼓、タン布林、カスターネット、ウッドブロック、トライアングル、銅鑼、シロフォン、大太鼓、鐘、グロッケンシュピール）、ハープ2、チェレスタ、ピアノ、弦五部、バス独唱、バス合唱

10/14
みなとみらい

10/15
名曲

Program Notes

シベリウス

ヴァイオリン協奏曲 二短調 作品47

大作曲家はしばしば卓越したピアニストでもあるものだが、フィンランドのジャン・シベリウス(1865～1957)はヴァイオリニスト出身の作曲家である。若き日のシベリウスはヴァイオリニストとして成功する野心を抱いていた。1891年にはウィーン・フィルのオーディションを受けている(結果は不採用)。しかし、極度のあがり症であることから、やがてシベリウスはヴァイオリニストになることを断念し、作曲家への道を歩むことになる。そんな作曲家がヴァイオリン協奏曲の創作に並々ならぬ意欲を燃やしたのは自然なことだろう。

初演は友人でもある名ヴァイオリニスト、ブルメスターが引き受けることになった。ところがシベリウスは経済的事情から、初演を当初の予定より早めなければならなくなる。ブルメスターの都合が合わず、やむをえずヘルシンキ音楽院の教師ノヴァーチェックを抜擢するが、初演は失敗に終わってしまう。技巧的に難曲であったことに加え、この初稿がやや冗長で明快さを欠いたこともあったのだろう。

シベリウスはひどく失望するが、その後、作品に大きく手を入れて、1905年に格段に洗練された改訂稿を完成させた。改訂稿の初演にもブルメスターの予定が合わず、ハリールの独奏で初演された。その後、時とともに評価を高め、やがて20世紀を代表するヴァイオリン協奏曲の地位を獲得するに至った。

第1楽章 アレグロ・モデラート 独奏ヴァイオリンが愁いを帯びた主題を提示し、雄大で幻想味あふれる楽想が展開される。楽章の中盤にカデンツァが入る。

第2楽章 アダージョ・ディ・モルト 淡く虚ろな木管楽器の導入に続いて、独奏ヴァイオリンが慈しみを湛えた主題を奏でる。

第3楽章 アレグロ、マ・ノン・タント 豪快な民俗舞曲風の主題で開始される。力強く技巧的な独奏ヴァイオリンと管弦楽が一体となって、熱狂的なクライマックスを築く。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1903～05年／初演：1904年2月8日、ヘルシンキ(初稿)、1905年10月19日、ベルリン(改訂稿)／演奏時間：約31分
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部、独奏ヴァイオリン

チャイコフスキー

交響曲 第5番 木短調 作品64

ピョートル・チャイコフスキー(1840～93)が交響曲第4番を1878年に書いてから、続く第5番を生み出すまでには10年にわたる空白がある。この間に彼の名声は飛躍的に高まり、演奏活動や社交に大きなエネルギーが注がれた。西欧でも作品の演奏機会が増え、88年1月には指揮者として西欧各地へと演奏旅行に出かけている。交響曲第5番はそんな充実期に誕生した。

チャイコフスキーが交響曲第5番で取り組んだアイディアは、ひとつのモチーフが全曲に有機的な結びつきをもたらすというもの。冒頭の「運命のモチーフ」が、闘争を経て勝利へと至る。ベートーヴェンの同じ「第5」を連想させる枠組みだ。作曲者の自己評価は揺れ動いたが、アルトゥール・ニキシュの指揮で成功を収めると、「第5を火に投げこむつもりでいた」のを思い改めたという。

第1楽章 アンダンテ～アレグロ・コン・アニマ 冒頭、クラリネットによる寂寞とした「運命のモチーフ」が奏でられる。構想段階の作曲者のメモによれば、これは「運命に対する完全な服従」。

第2楽章 アンダンテ・カンタービレ、コン・アルクーナ・リチェンツァ 弦楽器による静かな序奏に続いて、ホルンが哀愁を帯びた旋律を奏でる。甘美な音楽の流れを断ち切るように二度にわたり「運命のモチーフ」が力強く鳴り響く。

第3楽章 ワルツ アレグロ・モデラート 通例ならスケルツォが続くところで、流麗なワルツが置かれる。中間部は弦楽器の細かな動きが特徴的で、こちらがむしろスケルツォ風か。終結部に「運命のモチーフ」。

第4楽章 フィナーレ アンダンテ・マエストーソ～アレグロ・ヴィヴァーチェ 弦楽器による堂々たる「運命のモチーフ」で開始される。運命にあらがうように躍動感あふれる主題が続き、輝かしく祝祭的な終結部に向かって突き進む。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1888年／初演：1888年11月5日、サンクトペテルブルク／演奏時間：約50分
楽器編成／フルート3(ピッコロ持替)、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、弦五部

10/14
みなとみらい

10/15
名曲

Program Notes

10/19
土曜マチネー

10/20
日曜マチネー

Program Notes

ブラームス

ヴァイオリン協奏曲 ニ長調 作品77

44歳のヨハネス・ブラームス（1833～97）が、生涯で唯一となったヴァイオリン協奏曲への取り組みを本格的に考えたのは、交響曲第2番を作曲中だった1877年9月のこと。パブロ・デ・サラサーテがブルッフ作曲のヴァイオリン協奏曲第2番を演奏するコンサートを聴き、既存のスタイルではなく自分の考えを反映させた協奏曲を書こうと思い立った彼は、翌78年初頭よりスケッチを開始する。その年の初夏（5月初旬）には、前年に交響曲第2番を作曲した南オーストリアのベルチャッハという街を再訪し、約4か月間の滞在中に今度はヴァイオリン協奏曲を書き進めたのである。ちなみに滞在中にはピアノ協奏曲第2番、ヴァイオリン・ソナタ第1番、大学祝典序曲ほかの作品にも着手。まさに「音楽の泉」とでもいうべきサマー・シーズンだったのだ。

当初は全4楽章の大曲として構想していたヴァイオリン協奏曲を手掛けるにあたって、ブラームスのよきアドバイザーになったのは、20代の頃から親交があったヴァイオリニスト、ヨーゼフ・ヨアヒムである。独奏パートにおける各種の演奏技法について助言を受けたのはもちろん、ブラームスはヨアヒムが作曲したヴァイオリン協奏曲も高く評価しており、特に彼の出身地であるハンガリー風の曲調がお気に入りだった。ブラームスが第3楽章でハンガリーのロマ音楽をモチーフにしたのは、ヨアヒムへの感謝だといえそうである。1878年12月中旬に完成した曲は、ヨアヒムの独奏、ブラームスの指揮によって初演されている。

第1楽章 アレグロ・ノン・トロッポ、ニ長調、ソナタ形式。

第2楽章 アダージョ、ヘ長調、三部形式。

第3楽章 アレグロ・ジョコーソ、マ・ノン・トロッポ・ヴィヴァーチェ、ニ長調、ロンド・ソナタ形式。

〈オヤマダアツシ 音楽ライター〉

作曲：1878年／初演：1879年1月1日、ライプツィヒ／演奏時間：38分

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、ティンパニ、弦五部、独奏ヴァイオリン

ブラームス

交響曲 第2番 ニ長調 作品73

1876年11月4日、現在のドイツ共和国南部にあるカールスルーエという街でブラームスの交響曲第1番が初演され、大変な喝采をもって迎えられた。ブラームス自身は交響曲をやっと完成させたことで肩の荷が下り、解放された気分になったのかもしれない。翌77年6月には、アルプスの山に囲まれた保養地であるベルチャッハの街で新作交響曲（第2番）に着手。産みの苦しみを味わった第1番とは違い、半年ほどで曲を仕上げてしまったのである。ちなみに約3か月のベルチャッハ滞在中にはいくつかの歌曲も手掛け、さらには新しく出版されるモーツァルト作曲の〈レクイエム〉を校訂するという作業も行っている。

この曲もまたヴァイオリン協奏曲と同様、全楽章が長調で書かれており、「ブラームスの田園交響曲」と称されることも多い。都会を逃れたベルチャッハの空気とのんびりした日常が創作に影響を与えたのだとすれば、たしかにその評価はうなずけるものだろう。ブラームスは古典的・伝統的なスタイルの音楽を好み、音楽で物語などを描くフランツ・リストの交響詩などとは距離を置いていた。しかし、交響曲第2番には風光明媚な田園風景などを、聴き手が連想してよい雰囲気があることも事実だ。

完成した曲は、ブラームスの理解者だった名指揮者、ハンス・リヒターとウィーン・フィルハーモニー管弦楽団により初演されている。

第1楽章 アレグロ・ノン・トロッポ、ニ長調、ソナタ形式。

第2楽章 アダージョ・ノン・トロッポ、ロ長調、ソナタ形式。

第3楽章 アレグレット・グラツィオーソ（クアジ・アンダンティーノ）、ト長調、ロンド形式。

第4楽章 アレグロ・コン・スピーリト、ニ長調、ソナタ形式。

〈オヤマダアツシ 音楽ライター〉

作曲：1877年／初演：1877年12月30日、ウィーン／演奏時間：40分

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、弦五部

10/19
土曜マチネー

10/20
日曜マチネー

Program Notes